深江文化村を訪れていた詩人の竹中郁と親しかったようである。また、妻の一柳光はピアニストで、先述のルーチンに師事していたこともわかった。

以上、少し調べただけではあるが、様々な人間関係において、深江文化村にゆかりのある人物、特にルーチンとメッテルが音楽界で大きな存在であることが改めて認識できた。引き続き、調査を続け、深江文化村の果たした役割を発信していきたい。

【参考文献】
小野高裕『古き佳き芦屋の音楽ロマン』一九九二年
小野高裕『芦屋文化村物語』一九九四年
岡野弁『メッテル先生』リットーミュージック、一九九五年
本庄村史編纂委員会『本庄村史　歴史編』二〇〇八年
ポダルコ・ピョートル『白系ロシア人とニッポン』成文社、二〇一〇年
阪神間モダニズム展実行委員会『阪神間モダニズム』淡交社、一九九七年

【参考】
『音楽年鑑』昭和八年版、昭和七年十二月刊行
エマヌエル・メッテルの住所は中山手通二の三六の七、一柳信二の住所は兵庫県武庫郡住吉村兼松一〇の二九
『音楽年鑑』昭和一四年版、一柳信二の住所は渋谷区猿楽町四
『音楽公論』２（６）一九四二年六月刊行、アレキサンダー・モギレフスキー「ある提琴家の憶ひ出」

深江文化ハウス居住者健在

研究員　有吉康徳

深江文化村の南西の旧小寺邸の隣にある現在の太田酒造の敷地内に、長期滞在宿泊施設とレストランを兼ねた「文化ハウス」という洋館があったことについては、これまでにも小野高裕氏や森口健一氏により触れられている。また、芦屋市立美術博物館に保管されている洋画家福井市郎氏が描いた「芦屋浜風景」には、文化ハウスが描かれている。このたび、幼少期を文化ハウスで生活された村上公敏氏から話を伺うことができたため、その内容を紹介したい。

村上氏は、一九三三年生まれで、福井市郎氏が「芦屋浜風景」を描いた年にあたる。文化ハウスを経営していたのは村上氏の伯母の夫、松浦幹一氏で、松浦夫妻と村上氏の一家は共に文化ハウスで生活をしていた。

図１　福井市郎画（芦屋市立美術博物館蔵）
左端が文化ハウス

文化ハウスは、元々ドイツ人が建てた建物を長谷川病院が購入して別荘としていたものを、松浦幹一氏が賃借して貸別荘を始めたそうである。これには、松浦幹一氏が現在の愛媛県今治市の大三島において旅館の跡継ぎとして育ったことが背景にあるものと思われる。文化ハウスには、部屋が一〇室程度あり、五月から八月頃まで外国人が入れ替わり滞在していた。当時深江では地引網漁が盛んで、滞在していた外国人が物珍しそうに見物に来ており、漁師は邪魔になると怒っていたというエピソードもお聞きした。

図２　昭和 10 年代前半の深江文化村～文化ハウス附近

文化ハウスについては、一九三八年三月の本庄小学校卒業生が作成した地図では、「松浦文化ハウス　洋食仕出し」と記載されており、深江の住人には洋食の仕出しの印象が強かったようであるが、実態としては貸別荘がメーンの事業で、外国人が多く訪れていたため洋食を提供しており、仕出しはそのついでに行っていたのが実態であったとのことである。

一九三四年の室戸台風で文化ハウスは大きな被害を受け、一九三八年ごろ松浦幹一夫妻と村上氏の一家は、芦屋市松浜町の芦屋文化ハウスに転居した。芦屋文化ハウスに転居後、松浦幹一氏は仕出し屋をやっていたが、戦後どのようになったのかはわからないとのことであった。

深江文化ハウスが営業していた期間についてはわずか数年であったため記録に乏しいが、ルーチンをはじめとするロシアから亡命してきた音楽家だけではなく、彼らに会うために山田耕筰、近衛秀麿等も集い、その後の影響に鑑みるとその存在意義は大きかったと思われる。

【参考文献】

山形正昭「芦屋「文化村」の記」『大阪芸術大学紀要〈芸術〉』六、一九八三年
小野高裕『古き佳き芦屋の音楽ロマン』一九九二年
小野高裕『芦屋文化村物語』一九九四年
岡野弁『メッテル先生』リットーミュージック、一九九五年
本庄村史編纂委員会『本庄村史　歴史編』二〇〇八年